

理学部長就任に当たって

和田 昭 允



この4月から、はからずも理学部長の重責を負うことになり、恐縮すると同時にいささか困惑しているというのが偽らざる心境です。幸い学識識見ともに優れた久城・田沢両評議員がおられるので、力を合わせて1年間およばずながら全力投球をして、理学部の意気を大いにあげる基盤を作る覚悟ですので、よろしくお願い致します。

さて、理学部の活躍の舞台である理学という言葉ですが、昭和39年に理学部将来計画をまとめた小谷委員会の報告に、“従来主として理学部において研究・教育の行われていた基礎自然科学を理学と呼ぶ”と定義した上で、“理学は自然に関する真理を探求することを目的とし、それ自身、わが国及び人類の文化の建設向上に寄与するものである”と書かれています。自然の全てが我々の研究の対象だということであり、理学部という一体性をもって始めてこれが可能となるわけです。そういえば、コナン Doyle は彼の小説 (A Study of Scarlet) の中でシャーロックホームズに、“One’s ideas must be as broad as Nature if they are to interpret Nature” と云わせています。また、最近 Hawking の書いた “A Brief History of Time” は、宇宙の創造 (Big Bang)

から 100 億年の物質と生物の進化を経て我々人類が出現し、その知的生物がまた宇宙の起源について思いを巡らすという、全宇宙の時・空間の壮大なシナリオを、大筋ながらポイントを外すことなく鋭く描いています。たしかに、宇宙、素粒子、数学、情報、あるいは地球や生物等々といった理学の諸分野は、その底では、我々が考えているよりはるかに密接なつながりがあるように思われてなりません。

理学と理学部の一体性は自然そのものが保証してくれているといっても良いでしょう。わが理学部は、学問の歴史的背景や教育の便宜上、それぞれの教室という単位に分かれています。研究者はその自然探求の本能(?)の赴くままに、これらの港から自然という境界のない大洋に乗り出して行っています。自分のことを云って申し訳ありませんが、私も化学教室という港を出て、物理教室に寄港したまま居心地が良いので居ついてしまい、そこを母港として生物物理という海で網を引いているわけです。領海侵犯といわれないのが研究社会の有難いところです。こうなったのも、私が学生の頃から、化学教室での恩師の森野米三先生が“研究者であるからには二番煎じの研究は絶対するな”ということを目にタコができる程云って下さったためです。ところが、私の周りには秀才が雲のようにいて、とても一番煎じが出来るとは思えませんでした。そこで、できることは誰も居ないところに行くしかない、弱気の私にとって誠に合理的な結論を出したわけです。誰も居ないところで自分の思うように研究するのはよいものですが、そのように出来るのも、自然界には未開拓の分野が無限に広がっているからなのでしょう。

理学研究は広い自然が相手であると同時に、日

本という狭い島国に閉じ込められず広い国際社会が相手だということも嬉しいことです。科学に国境はないといえます。しかし、国境が本当になくなるのは国同志があらゆる意味で科学的に同じレベルになってのことではないでしょうか。わが国は、そして特に東大理学部は、科学研究の成果という狭い意味のレベルでは世界のトップグループに入っています。しかし、まだ、世界の一流若手研究者が東大理学部で1～3年間修業をして、研究履歴に箔をつけて行くところまで行っていません。私は、真の研究・教育は、わが国の若手研究者や学生が、このように他流試合に來た連中と混ざり合って議論することによって相互に刺激し高め合ってこそ、初めて満足できるものになっていると思います。このレベルまで理学部は残念ながら達していないということは、言葉の壁や生活・習慣の違いによるハンデキャップは多少あるにしても致命的なものでなく、東大ですらも国際常識から見るとまだまだ恵まれた研究環境ではないというわが国の大学の事情が問題なのです。

世界の一流の研究者が、良い仕事が出来るところなら万難を排しても乗り込んでくるという習性を持っていることは、良くご存知の通りです。理学院計画の第3次素案も、東大理学部が一流研究者が自然と集まってくるような、世界的研究交流の要衝となるようにとの願いを込めて書かれたものです。東京大学が国内の他の大学と比較してどうのこうのという議論は、科学の研究が世界を相手にしたものであるという正しい認識を持つならば、はるかに次元の低いものとなってしまいます。大学のレベルの評価を国内に限って行う限り、東京大学の発展はないということを論理的に云うことが出来ます。つまり、国内の問題とする限り、評価の原点を東京大学におくか、あるいは他の大学のどこかにおくということになり、そこで出てくる結論は、東京大学の発展をおさえて他大学を発展させる、あるいはその逆、ということになります。つまり、このような判断基準をもつかぎりレベルアップの力は働かず、重心を引力点とする

平均化の力しか働かないということです。これに反することは、特定大学のエリート主義ということになり、これはもちろん避けるべきということになります。学問が世界人類のためである以上、我々は大学のレベル評価の原点を国際的基準に求めなければなりません。つまり、最終目標は日本の全大学が国際的に超一流になり国際貢献を行うことです。しかし、これは一朝一夕には出来ませんので、その方向に向かう第一歩として、いくつかの基幹大学を国際化（前記の意味での）し、わが国の責任をはたすということになります。文部省はこのような大所高所に立った判断を当然すると期待致します。この意味で、理学部の将来計画としての理学院の目的が、東大理学部が国際科学社会の中で、日本を代表して活躍し貢献するという責任に基づいて立てられているということを私はもっと主張したいと思います。

東大理学部が世界に対して万丈の気を吐いてこそ、わが国社会の一般の方々から“東大頑張れよ”と応援してもらえらると思うのです。でも現状は少し違うようです。入学が難しいということは、良い大学の結果として出てくるべきものですが、現状は難関であれば良い大学であるという本末転倒がおこり始めているのではないのでしょうか。また、将来計画でも、ただ単に新しい名前をつけただけで新鮮味を出すようなことは、はなはだ島国的発想であり、お役所はごまかせても一般大衆の英知、あるいは国際社会の厳しい目をだますことは出来ないでしょう。また、お役所の方にしても目立ったトピックスだけを育てるやり方は、戦艦とゼロ戦だけで世界戦争に勝てると思ったあの苦い歴史の教訓から何も学んでいないことを示しています。

広い理学の基礎に立っての真理の解明、自然の探求が人類社会の発展に最大の寄与をしてきたことは歴史が証明しております。これは自然が示してくれている多様な現象を広く感受できる広域のアンテナを持った大学が総合力を発揮しなければ出来ないことです。

東大理学部は自然科学の全分野を広く包括し教

官・職員・学生約2200人が活発な研究を展開をしているわが国の最大最高の頭脳集団です。これからの20世紀末そして21世紀へと、わが国が創造性豊かな先進文化国家として、国際社会の尊敬を受けながら生き続けるために我々が果たさなければならない責任はまことに重大であります。

最後に、我々が研究しながら感じている喜びを、畠違いのシェークスピアが“アントニーとクレオパトラ”の中に書いているのでご紹介しておきます。

In nature's infinite book of secrecy

A little I can read.